

利用進む 生分解性マルチフィルム

生分解性マルチフィルムの利用が増えている。作物の収穫後に回収・廃棄物処理が不要なことから、労力削減や省力化ができる資材として期待され、特に雇用のいる経営者で使われている。生分解性マルチメーカーがつくる農業用生分解性資材普及会（ABA・池本克己会長）によると、2018〜2019年の出荷量（樹脂量）は3416tで、前年の10%以上の伸びで、農業用マルチフィルム全体の占める割合の約1割に迫っている。生分解性マルチを使う農家に利点や使うための工夫を聞いた。

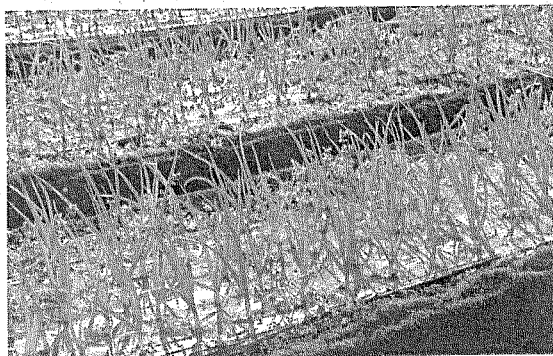
出荷量は前年比10%以上の伸び 多品目の野菜農家 5年で使用量倍増

千葉県東金市の農家・米、大豆、野菜を生産する室住圭一さん（49歳）は、5年前からマルチに合成肥料を使わない有機栽培だが、「ほとんど自分で直接売っているのを認めて約20年。水田2haと畑地5haの経営面積で、消費者への定期宅配や飲食店への納品、こだわりのある青果店への出荷、千葉駅の近くで開かれるマルシェなど、お互いに顔が見える相手。畑は40aから10aの面積で約30ヶ所に分かれていて、宅配用の野菜セツトを作るため、年間50〜60種類の野菜を栽培し、1品目を5aずつという少量多品目で生産する。労働力は夫婦と5名のパートさんという構成。



室住圭一さん

「旬を大事にしたいのせなくなる。3片付けをパットさんに頼むので人件費も掛かる。それならば人力で2〜3日の回収機械で30分に短縮



生分解性マルチを張ったタマネギの圃場（上下）

「秋から作って春に片付ける作業は、雑草もはびこらないので、普通のマルチでもすぐ剥がせるんですが、夏は枯れた状態になって根が深くまで残る。ポリマルチを剥がすためには、地上部だけを

マルチ片付けから パートさんを解放

生分解性マルチを取り入れたのは、収穫後の片付けの手間を省くためと「主としてこれからの季節、マルチの回収作業は、パートさんが担当していた」

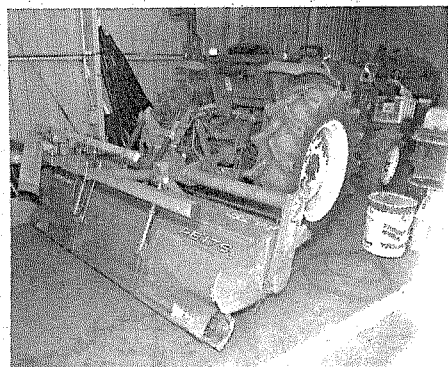
人力で2〜3日の回収 機械で30分に短縮

生分解性マルチは、種苗メーカーの資材力や口グに搭載されていたものを見た。

前半の雑草を抑えれば マルチの役割は達成

「マルチに一番期待しているのは雑草対策。慣行農法の場合は、除草剤で抑えることができるが、農薬は使わずマルチを使う。うちでマルチを必要としている作物の8割くらいは生分解性マルチを使っている。

「穴あけ品の規格は、ある程度のロットをまとめた方がいい。穴あけ品の規格は、長期保管ができないので、それを切り替えるまでどう活用するのかが重要。室住さんの生分解性マルチ使用量は、使い始めと現在を比べて2倍近く増えた。経営的にみて今の価格はトントンだが、普及させるためには安くしないと。廃材が問題になっているので、飲食店向けにも販売だから、国は少しでも補助すればいいのでは」と考えを語る。



モーターで回収した後、フレールでマルチを回収（上） タリと一緒に土にすき込む（下）

注文した穴あき規格が 使える品目を栽培

少品多品目の経営で生分解性マルチを使うための苦労しているのが、穴あき規格。穴あき規格のマルチは、規格の生分解性マルチを、穴あき品は通常一

「穴あき品の規格は、ある程度のロットをまとめた方がいい。穴あき品の規格は、長期保管ができないので、それを切り替えるまでどう活用するのかが重要。室住さんの生分解性マルチ使用量は、使い始めと現在を比べて2倍近く増えた。経営的にみて今の価格はトントンだが、普及させるためには安くしないと。廃材が問題になっているので、飲食店向けにも販売だから、国は少しでも補助すればいいのでは」と考えを語る。